2005WOC で初めてルーマニアがリレーを組める迄

WOC へ世界の選手を招致する！③

八尋弓枝

平均月収２万円弱のルーマニアにとって、2005WOC は哀しい話題だった。彼らの年収に相当する渡航費・参加費・滞在費は過去いずれの WOC に比べても最高額。
だけど、彼らにとって一生のうちで参加できる WOC があるとすれば、それは友人である私がいる 2005WOC しか有り得ないっ！
・・・というルーマニア選手招致まで１年間の記録です。

※海外遠征の為の支援金を募る機会の多い日本人選手にも、参考になればと思います。

暖冬のルーマニアで

2005 年 1 月 11 日深夜､無事にルーマニアのオトペニ空港へ到着。

道路は凍りついているが雪が降った形跡がない。薄めのダウンを二枚重ねるつもりでいた私は思わぬ暖かさにびっくり。迎えに来てくれた長年の友人エミールに聞くと、今年は異常気象だという。

車で 30 分ほどのエミール宅のベッドに潜り込んだ私は、再びのルーマニアにも関わらず心が躍らない。雪に覆われた美しいブカレストの街を見れる期待が裏切られたこともあり、明日からの三週間、世界選手権へのルーマニア選手招致に向け、資金の出所をどう発掘していけばいいのか、本当にできるのかという不安な気持ちを抱えていた。

ここでやるべきことのアウトラインは以下のとおり。

1) ルーマニアへの不動産投資について決着をつける。やるんだったら 3 週間の間に物件を買う。
2) ルーマニア選手招致の資金源になりそうな物品を購入、日本で売るべく持ち帰る。一番の有望株は「ジェロヴィタール」。ルーマニアが国家をあげて開発したアンチエイジングの化粧品！
3) とにかくビジネスに結びつきそうなものを探す。（曖昧･･･）

･･･ということで、翌日早速東川さんに電話をかけてみた。

私「あのー、私、ホントに来ました」

「やあ、お待ちしてましたよ。明後日会いませんか？　場所は･････」

ん～、なんだかダンディな声。どんな人なのかちょっとワクワク。海外で単身商売をやっている日本人にナマで会うのは初めての経験ですもの････

東川さんのお宅で

ブカレストのほぼ中心にあって昔の素敵な欧州風建物が建つウニリに東川さんの事務所がある。

玄関から通されると、白を基調にそこは天井が高くて、窓も大きく、なんとなくセレブな感じ。すぐに部屋になっていてルーマニア人の男性と女性がこちら側に座って仕事をしている。女性は秘書らしくにこやかに挨拶してくれた。男性は税理士らしい。

東川さんが、隣の部屋に案内してくれた。おぉ、なんだか雀卓があるぞ！

東川さんと瀬戸さんの事務所があるウニリ

４年前にルーマニアへ単身やってきたという東川さんは不動産投資と結婚紹介ビジネスで「プチ成功」を収めたという。これからは収穫の時期だと雀卓を前に目を輝かす。

「２年前に不動産投資してればねえ。２･３倍にはなってましたよ」

そうそう、私が前回ルーマニアへ来たのは 2 年前の冬でした。あのときはそんなことコレっぽっちも考えていませんでした･････

「不動産投資に廻すお金に制限もあるし、今回の投資理由を考えると無理しないほうがいいでしょうね･････････」

出発前に東川さんと何度もメール交換をしていたせいか話はすんなりと中止の方向に決まった。東川さんの話は、情報料を支払ってもいいくらいの価値ある内容だったのだが、東川さんは笑ってその申し出を断り、こう言った。

「八尋さんに会わせたい人がいるんです。ちょっと待ってて。その人に今から電話するから」

ウニリの街角で軽食「ゴブリツ」を売る女性

瀬戸さんとの出会い

10 分ほどで現れた瀬戸さんは、東川さんよりちょっと若い。名刺を差し出す感じはキビキビとした営業マンという印象。

「彼はね、つい３ヶ月前にこっちに来たんですよ。真面目でいい奴ですからお近づきになってやってください」。

こちらこそ･････と言いながも、頭の中では不動産投資の可能性を消してしまったことを再考していた。初期投資の負担が無くなるわけだけど、将来の儲けに対する期待資産はゼロになった。もともと、不動産価格が２倍以上になっているという期待から始まったことで、うまくいけば一発ホームランで十分なお釣りも出る計算だった。この話をリセットしてしまったのだ･････

日本で２万円近くで販売されているジェロヴィタールを買い込んで日本での資金作りにするのが今の所一番固いな･････などと皮算用をしていると、瀬戸さんのこんな発言が急に耳に飛び込んできた。

「･･･それで、僕ジェロヴィタールの個人輸出の会社を立ち上げたんです。」

えぇっ、この人も同じ魚を狙ってる

の！？　と驚くと同時に、いつジェロヴィタールの情報を得たのか聞いてみた。するとやはり 2004 年８月に日本でサイトを見たという。それって、私と全く同じタイミング･･･。その二ヶ月後にはルーマニアに来て会社立上げの準備を始めたとのこと。速いっ！！

「今、考えているのは日本にも拠点があったほうがいいなということなんです。万が一返品があったとき、送り返し先がルーマニアじゃお客さんびっくりしちゃうでしょ？　それにやっぱりいきなりルーマニアの会社から買うより日本にも拠点がある会社から購入したいってお客さんは思うんじゃないかと思って･･･」

私「じゃあ、日本の拠点の仕事は返品の取り扱いだけが仕事なんですか？」

　はいそうです、と瀬戸さんはすごーくまっすぐに私を見ながら答えた。ぜひ考えてくれませんか、と言う。

アンチエイジング化粧品、ジェロヴィタール。ルーマニアが国家プロジェクトとして開発した。

　と、私の頭の中に、東京で会った昔の上司Ｉさんの言葉が浮かんだ。『エンジェルプランのように、ルーマニアの起業家に資金援助をするのがいいんじゃないの？　配当をもらうだけでなく継続的な関係も築けるでしょ？』。

　よしっ！　この話、しっかりビジネスチックにキメてみましょう！！　面白そうじゃありませんか。

　私の帰国前に再度話合いの時間を持つことを約束し、ニコニコ顔の東川さんも一緒に、プラムから作られた蒸留酒パリンカで乾杯。別れた。

プロペニのミリタリースクール

　瀬戸さんらと出会った二日後、私とエミールはプロペニに向かった。昔からの親友、ヴィッキーに会うためだ。

　朝 5 時半にブカレストを出て、マイクロバスとトロリーを乗り継ぎ、3 時間かけてやっと 100 キロ離れたヴィッキーのうちに着いた。

　朝ごはんの準備をするヴィッキー。奥に座るのがアレクサンドロ 16 歳。

　ヴィッキーは16歳の少年アレクサンドロと暮らしている。彼の母親がミラノへ出稼ぎに行っているため預かっているのだと言う。アレクサンドロはマラソンの選手になるのが夢だ。憧れのエミールと一緒に近くの林へ走りに行ったが、エミールに１時間半ほど遅れてやっと帰ってきた。

　だからお前はダメなんだっ！とキツくエミールに言われながらテーブルで頭を抱えているアレクサンドロを見ると、おかしくて笑いが込み上げてくる。
　フルマラソン二時間半のエミールも、16 歳のコドモにそんなにムキに怒ることないんじゃないの？

　プリプリしながらブカレストに帰っていくエミールを送った後、ヴィッキーと一緒に 30 キロほど離れた町、ブレアザに行った。ここはヴィッキーの職場でミリタリースクールがある。彼女はここでオリエンテーリングのトレーナーをやっているのだ。

　この日は土曜日だったが教え子全員が集まっていた。17 歳位で男女は半々くらい。文武両道の優秀生揃い。
　彼らは毎日、学校の授業とは別に数時間のトレーニングを行っており、国内各所のＯＬ大会で優勝を競っている。この日のトレーニングメニューは30キロ程度の競歩だ。

トレ前に全員集合した教え子とヴィッキー。これから競歩で十数キロ先の丘を目指す

　ミリニタリースクールの近くには、牧場となっている高原や山、適度な傾斜のある土手等、自然で美しい天然のトレーニング場に囲まれている。すぐ近くにＯ-マップの林がある環境の中、毎日変化のある活動をしている。日本からの選手受け入れも可能だそうだ。もし、興味があれば私八尋に一報して欲しい。

　ブレアザの川沿いの傾斜のある土手を何度も往復するトレーニング中。

ヴィッキーの涙

　プロペニに滞在したのは一週間だった。私が初めてルーマニアに来たときも、ここ、プロペニのヴィッキーのうちに滞在したのだ。あのときは 90 歳になる彼女の母親も一緒だったが既に他界。同居していたロミカも今は他に彼女を作って出て行き、今はルーマニアとイタリアを行き来する日々らしい。

　ヴィッキー手作りのアルディ（唐辛子のピクルス）を食べ、チョルバ（スープ）を食べ、チーズやらハムやらをルーマニア独特のブラウンパンで食べていると、実家に帰ったような落ち着きを感じる。実際、ここ 3 年は本当の実家に帰らない一方で、ここには 2 回も“帰って”来ているのだ。

　明日はブカレストに戻るという最後の夜、ヴィッキーは髪を染めた。彼女のブロンドは実は染めていたのだとは 14 年の付き合いの中で初めて知ったことだ。このためにわざわざやってきたクリスティーナという友人に髪を染めてもらうヴィッキーの正面に座り、初めて見る珍しい光景を眺めていた。

　ヴィッキーも口元をニッとさせながら私を見ている。
「明日、帰るんだね」と彼女は言った。
「そうだよ」と私は返したが、以前だったら、今度いつ会えるか分からないと言って泣いたりしていた彼女が、今回は冷静なのを面白く感じていた。

　弓枝には兄弟はいるの？　と聞くので「妹は敬子で、弟はヒロシていうんだ」と答えると突然彼女は「･･･ヒロシマ!!!」と叫んで目を見開いた。私、大爆笑。ガイジンって思いもつかない連想をするのね･･････

　再び冷静になったヴィッキーは、最初に弓枝（私のこと）がここに来たのはいつだったけ？と、私に聞いた。「14

年前だよ」と答えると彼女は「14年‥‥！」とつぶやいてまたじーっと私を見つめた。涙が浮いていた。私も鼻がツーンとしてきた。

「今度の世界選手権でね、ルーマニア選手を招致したいんだよ。今回ここに来たのもそのためのビジネスを探しにきたんだ。」と言うとヴィッキーは、ふうんと頷いた。

水道光熱費が日本と変わらないルーマニアで月収150～250ドル程度で暮らすことは決して楽なものではない。家もあって助けてくれる友達もいる、とヴィッキーは頼もしげに言う。でも、意欲も実力も持ちながら、経済的理由で世界大会に出場できないという状態は、本人の力だけはどんなに頑張ってもどうにもできないこと。航空費も含めると月収の10倍必要な愛知世界選手権はその最たるものだ。そこに力を貸すことは、ルーマニアに友人を持つ自分の務めではないかと、ヴィッキーのうるんだ目を見ながら改めて強く心に感じた。

革命後のルーマニアの生活

ルーマニアで革命が起こったのは1989年12月21日のことだった。知らない人も多いと思うので、ここで改めて現在のルーマニアの状況を含め簡単に説明したい。

革命で大きく変わったのは、チャウセスクが死んだことだ。彼は長く大統領としてルーマニア政治のトップにあって、この国をメチャクチャにしてしまった。彼がろくな裁判も受けられずに射殺され、ボロキレのような姿でTV映像として世界に流れ出たのは、一人の独裁者を生み出す共産主義の分かりやすい結末だった。

仏革命以来とも言われた流血革命の舞台の一つとなったユニバルシダッティ広場。「動くものは全て撃て」という政府軍・警察の銃撃のため、多くの市民が死んだ。

革命後、ルーマニアは資本主義を導入。だけど経済は長く低迷している。
不動産価格はここ2年で2，
3倍になったけど、それはつまり、「土地所有者（＝資産家）」の世界。それになぜ価格が上がったのかといえば、2007年のEU加盟に向けて、物価を他ヨーロッパ諸国と合わせなければならないという外部的な事情からだ。一般の人の給料はさほど上がらずに、物価ばかりが急激に上昇している。

ルーマニア人は二つに分かれる。
「チャウセスクが死んで良かった」と言う人と、「チャウセスクのころがマシだった」と言う人だ。我が友人エミールは後者の人間である。
「昔はオトナになったら政府が家をくれた。OLクラブの子供達を連れて、オリエンテーリングキャンプをしに汽車に乗ってホテルに泊り、レストランで食事をしても平気だった。今はホテルに泊るだけで60ドルもする。どんなに働いても、給料が全て生活に消えてしまう中で、自分の家を持てることは絶対無理。
自由にモノが言える、外国へ行けると言って喜んでいる奴もいるが、それがなんだって言うんだ。」

ルーマニアに住む彼らと日本に住む私の間には深い溝がある。友達だからという理由で縮められる深さではない。絶対に互いの立場を真に想像することが出来ない程、その溝は深くて大きい。

いつも穏やかなヴィッキーの台所。ｱﾚｸｻﾝﾄﾞﾛは勉強中。ﾙｰﾏﾆｱの旧世代は学校で英語を学ぶ彼らをｲﾝｸﾞﾘｯｼｭｼﾞｪﾈﾚｰｼｮﾝと呼ぶ。「新しい世代」という意味合いだ。

ルーマニアの会社と契約を結ぶ

ブカレストに戻った私にエミールが嬉しい報告をしてくれた。先にお会いしていた瀬戸さんから電話があり、明日にでも彼の事務所に来て欲しいというのだ。
瀬戸さんの会社は、ジェロヴィタールの個人輸出業をしようとしている。主な市場は日本だ。ルーマニアに会社を設立したから「輸出」なのである。

前回お会いしたときは詳しい話にはならなかったが、当然ビジネスとして私は彼の業務に関わりたい。そこで得た報酬をルーマニア選手招致に使いたいし、継続的な関係をルーマニアと築くキッカケにもしたいからだ。

日本に顧客窓口としての返品拠点を設けたいという瀬戸さんの要望を考え、私にとっても瀬戸さんにとってもメリットのある「絵（お金の流れと商品の流れ）」を描き、話合いに臨んだ。なにしろ二度しかお会いしていない人との話合いだから長時間におよび、朝１０時から昼食を挟み、夕方５時まで話し合った。‥‥で、とにかく話はまとまった。契約締結だ（大げさ？）。

瀬戸さんの社名はキーヴィタール。ルーマニアが国家プロジェクトとして開発したアンチエイジング化粧品「ジェロヴィタール」を割安に、個人輸出の手助けをする会社である。

KeyVital Cosmetics

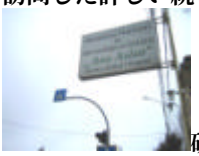
http://www.keyvital.com/
瀬戸さんの会社名はキーヴィタール。ジェロヴィタールが割安で買えます。

実際の稼動はこれから（結果的には2005年の春からだった）だから、どうなるかは全然分からないが、当初考えたアウトライン3)は達成されたことになる。商売を通じて人との繋がりを継続的に持つことができるという、理想的な関係をルーマニアに作ることができたことに、私は大満足だった。
やったあー！　と帰りの地下鉄の中で快哉しながら帰宅した。

ジェロヴィタールの国立研究所（病院）へ行く

ここまで読んでいただいた人の中にアンチエイジング化粧品「ジェロヴィタール」という言葉の響きに胡散臭い印象を抱く人も多いだろう。
ご安心あれ！　実際にジェロヴィタールを使用した若返り治療を行い、現在も研究開発をしている国立研究所を、ルーマニア滞在中に訪ねた。場所はオトペニ空港のすぐ近く。この国立研究所（＝病院）で、アナ・アスランという医学博士の下、約50年前にジェロヴィタールは生まれたのだ。

訪問した詳しい続きは次号で！



研究所入口の看板

八尋　弓枝 yumieyahiro@yahoo.co.jp
*当ﾄﾞｷｭﾒﾝﾄに登場する人物は実在の人物と異なっているケースがあります。